

不安な日々を乗り越えて—葛さんの場合

学研株式会社

代表取締役社長

葛 鋒

結核発病，そして，二度の再発

私は、中国の黒龍江省出身の葛（かつ）と申します。2005年に日本へ留学、幸せな学生生活を過ごしていました。しかし、残念ながら2006年12月頃に体調が悪くなり、日本語学校の健康診断で結核と診断され、その後半年間の治療を受けることになりました。留学先の異国の地で人生初の入院です。家族や親友も側におらず、色々と悩み、気分は落ち込んでしまいました。

当時、結核は結核菌によって引き起こされ、人の肺に好発し、非常に伝染しやすいと理解していましたが、具体的にどのような病気かよくは分かっていませんでした。結核は昔の難病で現在の治療技術によって簡単に治ると信じていたのです。

しかし、第一回目の治療終了後、大学院入試勉強とバイトの両立が、身体の大変な負担となっていました。2008年11月に結核が再発し、半年の化学治療を受けることになりました。この再治療が、私に結核について再認識させることになったのです。2009年12月には二度目の再発が起こり、この時「多剤耐性肺結核」と診断されました。やっと治ったと思った矢先また再発するとは想像すらできませんでした。この時になって初めて、私の甘さから十分な治療を受けることをせず、服薬も不規則にし、自身の生活上の悪習慣を続けていたことが結核の再発率を高めることとなったのだと知りました。

この多剤耐性肺結核というのは、結核菌が抗結核薬に耐性を獲得し、通常の抗結核薬では治療が困難になることを意味しています。この場合は標準的な治療によっては治らないので、結核が命にかかわる重病であることを知ることとなりました。以下は、私が体験した数年間におよぶ結核との闘いのストーリーです。

心の葛藤と新たな自分を見つめて

初回の治療の時は、結核に対して大きな恐怖感を抱くと共に、半年間という長い治療期間に対しても不安を感じていました。中国にいる両親や親友から離れ一人異国の日本で留学生活を送る中で、結核という病気と闘うことに無力感を感じていました。しかし、看護

師の温かい励ましの言葉や支援、また、主治医の病気についての専門的で分かり易い説明のおかげでやっと落ち着くことができ、病気と闘う勇気が湧いてきました。当時の私は体調が弱く、頭痛、吐き気がひどく、食欲もない状態でした。そんな中で、半年間の治療で病気が完治したと考えていました。退院したときのうれしさと同時に、健康は何よりも大切だと心から思いました。

しかし、2008年にその完治したと思っていた結核が再発したのです。当時、再発したことにとっても驚きましたが、一回目のような不安感や恐怖感はありませんでした。必ず治ると信じていましたが、当時私は東京大学で修士課程に進学しており、病気によって勉強が中断されることに非常に不安を感じていました。治療期間に再び半年を要しました。

この二回の結核治療を通じて完治したと思っていましたが、大学院修論を提出する直前である2009年12月23日にまさかの再々発で、それが多剤耐性結核と診断されたのです。ここに至って初めて、結核は命にかかわる治らない可能性がある重病であることを認識し、死ぬことへの恐怖感が頭から離れなくなりました。私の人生にとって一番辛く、絶望の時期でした。病気に対する不安から、主治医や看護師に自分の健康状況を数時間ごとに確認するようになりました。また、多剤耐性結核の診断によって、悲観的になったり、生きていくことに自信がなくなって、不安と焦りを抱いていました。これが私の多剤耐性結核に対する最初の反応でした。

不安な日々を乗り越えて

時間が経つうちに、毎日の病院での生活に少し落ち着きを取り戻すようになりました。主治医や看護師、皆様の家族のようなケアのおかげです。この天使にも思えるような方々が私の周りにいなかったら、私は本当にこの世に生きていられなかったかもしれません。治療してくださった先生の言葉一つひとつに力をいただき、勇気づけられたのです。穏やかな日々の治療を通じて、心が徐々に落ち着いてきました。それだけで

なく、再び社会に戻って、以前のような生活を続けていける自信が生まれました。多剤耐性結核という病気に打ち勝つ自信が持てるようになったのです。薬の副作用のために関節に大きな痛みを感じていましたが、これは結核が少しずつ治ってきているのだと積極的に考えるようになりました。「とにかく頑張るのだ」という気持ちが溢れてきていました。

その頃、主治医から「手術すれば完全に治る可能性が高い」と助言され、それに同意しました。最初は手術に対して非常に恐怖感があり、悩んでいました。しかし、家族や親友たちに心配をさせたくない思いから恐怖感を心の底に隠し、全てのことを自分で背負おうと決意しました。一人で海外生活する私のような外国人患者は日本人の患者さんより精神的なストレスがかなり大きいと感じました。

故郷を懐かしむことやそれを表に出すことで感傷的な気持ちになると、誰とも話したくなくなるので、病室にいる他の日本人患者に無愛想な人なのではないか、怒っているのではないかと誤解されないか不安に思うこともありました。手術後、病気の状況が良くなり、私は主治医や看護師などに体調についてよく報告をしていました。完全に治ることが信じられるように

なり、休み時間を守って、病棟内散歩や読書などを行うことで病院生活が以前より充実してきました。

今の私は、東京大学大学院をスムーズに卒業し、2013年には留学生向けの進学塾を経営する学研株式会社を創立いたしました。私と同じような異国で頑張っている留学生達を、個別指導の形で進学を応援したいという思いからのスタートです。毎年、100名以上の中国人留学生を志望校に進学させています。今後、社会貢献として、また誰かを助けていきたい思いでいっぱいです。

入院期間中、大変お世話になった先生達、そして看護師の皆様、今まで本当にありがとうございました。🍵



多剤耐性結核治療後、結核研究所にて講演を行う筆者（2010年）